札幌空襲⑤

おっかない！空襲警報のサイレンの音

川越慎一さんのお話から

○国民学校　昭和十六年（一九四一年）の国民学校令というきまりにより、それまでの小学校を改めて成立した教育機関。

○配給制　米や味噌、砂糖などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。

私が札幌市立桑園国民学校の一年生になった当時、札幌神社、円山にある今の北海道神宮に一年生が全員そろって歩いて参拝に行きました。先生が「君たちは、日本が戦争に勝つように神様にお祈りしましょう。そして、君たちが大きくなったらお国のために役に立つ人になると神様の前で誓いましょう。」と言ったので、そのようにお祈りをしました。

戦争が始まったときは、ラジオからは、毎日のように日本が勝ったという放送が流れてきます。ところが、私たちが感じる生活はだんだんと苦しくなっていきました。

例えば、主食であったお米が配給制になりました。お米だけ食べたということはあまりなく、ご飯にいろんなものをまぜて食べていました。やがて、そのお米も配給がなくなってきたのです。食べ物といえば、ジャガイモやカボチャ、あるときは、でん粉という粉にお湯を入れた、でん粉がきをすすり、お芋も一つか二つでした。私だけでなく、みんながおなかをぺこぺこにしていました。着るものや履くものもだんだん配給制になっていきました。一番困ったのは、学用品です。新学期が始まるとノート、鉛筆、消しゴム、クレヨンを文房具屋に行って買うのですが、なかなか手に入りませんでした。ですから、本当に大事に使ったものです。町の電信柱、あるいは学校の廊下に「ぜいたくは敵だ。」「欲しがりません勝つまでは。」というポスターが張られていました。私たちはその言葉どおりに我慢して頑張っていたのです。

戦争は初めのうちは日本が勝っていたのですが、だんだんとアメリカの飛行機が日本を爆撃するようになりました。東京や横浜も爆撃されました。昭和二十年（一九四五年）ごろ、いよ

いよ北海道も爆撃されるようになってきたのです。根室、釧路、室蘭という港の都市です。近くでは小樽、江別、石狩市にある浜益なども爆弾で空襲を受けています。

たしか四年生のころだったと思いますが、ある日の朝早く、突然、札幌で空襲警報が発令されました。サイレンが不気味にウゥーッ、ウゥーッ、ウゥーッと鳴るのです。怖かったです。それよりも怖かったのは、父がものすごく緊張した恐ろしい顔をして、「お前たち、すぐ押し入れに入れ。」と言うのです。父親を見ると、玄関の前で仁王立ちをして空をじっとにらんでいました。そうすると、母親が、「父さん、そんなところにいたら危ないから中に入りなさい。」と叫ぶのです。サイレンの音、母親の叫ぶ声、私は押し入れの中で急にこわくなりました。そのうちに、バリバリバリッ、バリッバリバリッと、機銃掃射の音が二回聞こえました。その音を聞くと、もっと怖くなりました。「おれは、大きくなったら飛行機に乗ってアメリカをやっつけるんだ。」という勇ましいことを言っていたのですが、そのときは、実は「こわいな、戦争って嫌だな、早く終わってくれないかな。」と思ったのです。飛行機が去り、一段落しましが、私の気持ちはだれにも言えませんでした。

○機銃掃射　機関銃などを敵をなぎ倒すように射撃すること。

イメージ図

空襲を恐れる親子

○満州　中国東北部。

昭和二十年八月十五日、私たちは国民学校で、競馬場の広い土地に、食糧増産といって畑をつくり芋をつくっていました。太陽がぎらぎらと光ってものすごく暑い日でした。家に帰ると、いつもより早く帰ってきていた父親が、茶の間に座ってじっと頭を下げていました。どうしたのだろうと思ったら、母親が「日本が戦争に負けたのだよ。」と言うのです。「えっ。」と思いました。それを聞いたときに、本当に力が抜けていくような感じがしたことを覚えています。

戦争は終わりましたが、生活は少しもよくなりません。それまで満州や中国で戦っていた兵隊がどんどん日本に帰ってきましたが、品物はないのでますます苦しくなってくるのです。太平洋戦争で死んだ人は日本人だけで約三百十万人、死ななかったけれども、家が壊されたりして災害を受けた人が一千万人、そういう犠牲を払ったけれども、戦争には負けました。

そのころ、冬の暖房は石炭ストーブでした。私の家の前に広い土場というところがあって、そこに石炭がたくさんおろされるのです。石炭は馬車に積んで運ぶのですが、スコップで積むとばらばらっと周りに散らばってこぼれるのです。馬

イメージ図

石炭を積む馬車

が出ていった後、子どもたちがバケツを持って行って、その石炭をバケツに拾うのです。苦しい生活の助けにと思ってそんなことをやったのです。

私は、食糧難のときには桑園にいたので、汽車に乗って手稲の駅を降りると、その辺りはずっと原っぱでした。そこで、わらび取りをした記憶があります。わらびをゆでて、ご飯のかわりに食べました。

あるときは、買い出しといって農家に野菜を買いに行きました。みぞれが降る秋口で、冬囲いといって芋やニンジンを土の中に埋めているのです。そこにある芋やニンジンを分けてもらえませんかと農家の人に言いますが、お金ではなかなか売ってくれません。最後のところで、ゴボウをやっと買えてリュックに入れて、屋根のない貨物列車に乗って帰った記憶があります。そうやって、少しでも生活がよくなるのだろうと思って頑張りました。

今は、甘い物でも何でも手に入ります。家に行けば、お風呂、テレビ、冷蔵庫、洗濯機、携帯電話もゲームもある。私たちが小さいころには何一つありません。そういうことを考えると、戦争が終わって六十五年、今は平和なのではないでしょうか。平和であることは、幸せだと思います。私は、戦争は絶対にもうやってはならないと思います。そして、戦争を知らない人たちも二度と戦争をするまいと心に誓って、みんな思いやりや励まし合って幸せになっていってほしいといつも思っております。

DATA

平成22年度手稲区平和事業
聴き取り
・平成22年11月30日
・新陵小学校

川越慎一（かわごえ・しんいち）さん
・昭和10年（1935年）生まれ
・札幌市手稲区在住